

## 都築勉『おのがデモンに聞け』 (吉田書店、二〇二一年)をめぐって

伏見 岳人

私もこの場にいるのが大変アウェイな感覚であるというネタを用意していたのですが、まさか先に谷口先生に言われてしまうとは思わず、かつ、いままで接したことがないようなほとぼる開拓者精神を見せただけだし、その衝撃をいまだに吸収できずにあります。まだまだ自分の専門の穴倉にこもったような、引きこもりのような状態——コロナを言い訳にしているところもありますが——でやっておりまして、今日はかなり限定した角度から、私が読んで面白かったこと、この機会に都築先生に教えていただきたいことを、いくつかお尋ねさせていただきます。

### 一 東大政治学の「伝統」

自己紹介の前に、先に本書に関する私のイメージからお伝えさせて

いただきますと、取り上げられた五人の共通点を独特な形で書かれた印象を受けました。以下、歴史研究者として、お亡くなりになった方には敬称をつけずに呼び捨てにしますが、その点にご容赦いただければと思います。この五人の専門が異なることに注目して、通常の系譜論とは一線を画し、それぞれが独自に向き合って政治に関する考察を深めたと位置づけられています。小野塚喜平次から吉野作造、あるいは小野塚から南原繁、丸山真男へという系譜にしばしば接しますし、吉野、南原、丸山についてはそれぞれ新書レベルから重厚な研究書まで存在し、さまざまな最新の研究が生み出されています。それを踏まえ、個々の政治学者がどのように独自に研究に取り組んだかという話を、政治学の括弧つきの「伝統」と位置づけるところが、本書の特徴だと思いました。

なんといっても印象的なのはタイトルでありまして、「おのがデモ

ンに聞け」という南原の発言が引かれています。これは、京極純一の文章の中で、南原の発言として紹介されているわけですが、京極の別の文章に当たりますと「おのがデモンに聞いて」という表現もあるようです。これは、南原自身が自分に向けた形容句的な表現、自分が「おのがデモンに聞いて」こう考えたという文脈での表現なのかなという気がします。「聞け」というと、ちょっと上から目線な感じで——上から目線の論評が多いという本書の南原評もありましたが——同時に「おのがデモンに聞いて」という表現には、自己対話をしなさいという趣旨もあったのかなと。そちらのニュアンスも含めていくと、若干イメージが変わってくる印象を受けました。南原を回想する文脈で京極が述べている話を用いて、それが小野塚喜平次以来の「伝統」——政治学には先生はいないという、自由な学問の括弧つきの「伝統」——があつたという話だと私は理解しました。

ただ、その中でおそらく都築先生は、京極純一の学説に関する位置づけへの思い入れが強い印象を受けました。前から読んだので、特にそういう印象を受けたのかもしれませんが。一九六六年に刊行された『植村正久』の初出は、一九六一年の南原古希記念論文集でしたが、これは丸山および福田歓一の要請によるものであり、本書一九八頁で「本格的な思想史研究」であると表現されています。また、本書三二四頁では「政治過程論」の講義は日本政治思想史と言つてもよいもの」という表現まで出てきます。さきほど、前期京極説と後期京極説をどう理解するかという点について谷口先生から問題提起がありました

が、一九六〇年代以降の計量政治学の業績や政治意識の研究などを前提に考えた時に、それとは違うものをこの水脈に見出そうとされたことが特徴的だと思います。

本書の中では、京極の一九六八年の『政治意識の分析』の中に収められている「リーダーシップと象徴過程」を取り上げ、岡義達の論文「権力の循環と象徴の選択」と並ぶ理論的考察だと述べられています。都築先生が一九八九年に書かれた「嘘の政治学」というご論考の注五でも、この京極論文を政治と言語に関する理論を扱った画期的な論文であると述べられておられます。そこに至るご自分のライフストーリー、ライフヒストリーも含めて、本書をお書きになられたのはと理解いたしました。そして、一九七五年度の政治過程論の講義ノートの分析があつて、一九七九年刊行の東大出版会教材部から出た本でどのようにコスモスという議論が出てきたか、さらにそれが一九八三年の『日本の政治』にどう結びつくかという流れがクライマックスであつて、この本に至るまでの日本の政治学の一〇〇年という構造になっていると思います。

## 二 吉野作造の位置づけ

ここで少し自己紹介いたしますと、私は日本政治外交史を専攻し、明治後期から大正前期を狭い意味での専門と位置づけています。今日お招きいただきましたのは、二〇〇八年頃、私を含む東京大学の

院生たちで、当時は東大の社会科学研究所にいらっしやった五百旗頭  
薫先生に代表をお願いして、吉野作造講義録研究会という若手チーム  
の共同研究を行ったことが縁ではないかと思われます。そこでは、政  
治史・政治外交史の方法論をもう一度見直そうではないかという問題  
意識をもち、政治史研究のバイオニアである吉野作造がどのようなア  
プローチをとったかを考え直そうとしました。その共同研究で考えた  
ことやその後に考えたことをもとに、今日は吉野を中心とするコメン  
トとして、本書の吉野作造の位置づけについて述べさせていただきます。

本書では、丸山の吉野評として、「ユニークな存在」であるという表  
現が引かれています。また、学者というよりも言論人に近いという評  
価について、千葉先生や谷口先生からもご指摘がありました。大量の  
政治評論を発表し、多方面の社会活動に力を割いたことは、吉野につ  
いてよく言われます。また、後年に彼が東大を辞めたあと、特に注力  
した明治文化研究も、その評価が難しいものです。本書の一五七―一  
五九頁でも、資料集的な位置づけであって、文化史や思想史にも関心  
を寄せたため、オーソドックスな政治史の叙述には向かわなかつたと  
いう評価なされています。そして、他の四人の政治学者と比べると、  
吉野に独自のものは、朝鮮や中国への注目である指摘されています。  
ただ、彼が生きた時代は大日本帝国が徐々に拡大し、植民地化が進展  
する時期でしたので、そういう時代背景もあって、他の四人とは違う  
ユニークさになった気もいたします。

これらの位置づけは、吉野研究の文脈で言いますと、一九五〇年代  
後半から七〇年代ぐらいの伝統的な枠組みに近い印象を受けました。  
つまり、戦前は極端に言えば暗黒だったという評価がその前にあって、  
それに対して戦前の中から良いものを見出そうとし、大正デモクラ  
シーの意義を評価しようとする潮流がこの時期に生まれてきます。吉  
野は不十分な民主主義者であると言われていた状況に対して、そうで  
はなくして明治憲法下の内在的な発展を吉野は説いたのであるというこ  
の時期に出てきた議論が、本書で書かれている吉野像に近い印象を受  
けました次第です。

その上で、二〇〇八年からの共同研究の成果として、二〇一六年に  
刊行された『吉野作造政治史講義』という本を通じて、われわれが次  
の世代として何をしたいかかを申し上げたいと思います。これは、  
吉野の講義を聴いた学生のノートから、なるべく正確に吉野の講義を  
再現しようとしたものです。丸山真男講義録との最大の違いは聴講者  
のノートが非常に限られることでした。吉野の講義のノート自体がか  
なり少ない中、四年度分を収めて、解説で補充した本になります。そ  
こから浮かび上がってきたのは、吉野が講義の中で体系性を志向した  
特徴です。私は括弧つきの「自由」の展開と呼びましたが、今日風に  
言うならば、ナショナリズム、デモクラシー、そして社会民主主義  
——吉野はこれを社会主義と呼びます——、これらの世界的トレンド  
がどのようなバランスで各国において現われているかを、かなり体系  
的に講義の中で論じていた事実が、この研究を通じてわかったことで

す。

吉野は当初はヨーロッパ政治史を中心にやっていますが、その後は中国革命史の研究にも取り組み、後半は日本政治史に移っていきます。残念ながら、まとまった中国革命史の講義ノートは見つかっていません。本から直接わかるのは、初期のヨーロッパ政治史研究から後年の日本政治史研究へどう移ったかですが、そこにどのような体系を見出せるかを皆で議論してきた共同研究でした。

本書は吉野講義録について扱ってくださり、ここまで丁寧に述べていただいた研究は少ないので、大変ありがたく思います。その上で、本書の中で評価は、やはり従来型の吉野の解釈に近い気がしていて、情報収集能力がある、ないしは民族主義の力への認識を持ち、細かなヨーロッパの事例分析の枠組みを中国の事例でも応用したことが言及されています。そして、フランス革命のような大きな話を期待した学生は、その細かさに驚いたであろうという表現が、一一五頁にあります。ただ、吉野講義録を見ると、一九一五年度や一九一六年度にフランス革命の授業をしていますし、一九二四年度の日本政治史講義は日本憲政史と題して、今日の日本政治外交史の授業で述べられるような国家建設、憲法制定、条約改正、また日英同盟の締結など、オーソドックスな講義をしていたことがわかります。また、その後の講義ノートは見つかっていませんが、関連資料を調べますと、普通の意味での日本政治史の叙述に吉野は晩年注力していたこともわかっています。

吉野自身も自分のイメージとして政治評論が多いと言われていることは

意識したようであり、さきほど夜店という言葉も話題になりましたが、

吉野は政治評論と政治史研究を統合可能であると考えていたようです。吉野の表現を借りると、政治評論を通じて自分がめざしたのは、医学における臨床講義ないし法学における判例研究に近いものである。それらは、医学や法学の発展にとって非常に重要な取り組みであって、政治評論も政治の学問において同様の位置づけを持つものである。そして、それらと、自らの「原論」との相互作用でもって——吉野はヘーゲル的なところがありますので——統合していくというのが、吉野のヴィジョンでした。千葉先生からお話がありましたのが、残念ながら四〇代後半からすでに体が悪く、東大を辞職してから病気になる、原論をまとめる時間はありませんでした。しかし、この講義録の発見によって、彼の志向した体系の形はかなり明らかにできたと思っています。

また、この本を生み出すことによって、これまでは必ずしも明示的にわかっていなかった政治史研究の系譜の強さも浮かび上がってきました。たとえば、都築先生の本の九〇頁に、小野塚喜平次のイギリス、フランス、ドイツの研究がまず下敷きにあり、吉野と共通しているとあります。吉野はそれをふまえてオーストリアやベルギーなどの中小国も扱い、それらの偏差や多様性の中から何を発見することができるかを志向していました。さらには、講義録中の参考文献として小野塚の文献が多々言及されています。講義録では、最初の頁に膨大な参考文献リストがあがっていますが、これは小野塚喜平次が東大の政治学講

義のスタンダードとしてやっていった方法を踏襲したものであると聞いたことがあります。最初に膨大なビブリオを配って、その上で自説を述べていくやり方です。スタイルもこのように類似している。さらには、後継者の岡義武の最初の研究はビスマルク期のドイツ政治史研究ですが、それも吉野との連続性を見ることができます。吉野と同一のテーマを扱いながら違う解釈を提示することを岡がかなり確信的に最初の論文で試みたことが、この講義録の発見によってわかりました。この点は、岡義武の『明治政治史』下巻という岩波文庫の解説で触れました。

質問としてお伺いしたいのは、このような体系の批判的な継受——谷口先生のさきほどのお話も同種かなと私なりに理解させていただきましたが——、そういう意味での「伝統」を見出すことができるのではないか、ということ。人格的には敬愛しつつ、学問の世界においては非常にきびしい批判と競争、衝突があり、そのような関係をこの五人の政治学者の中からあらためて見出すことができるか、というのが大きく伺ってみたい内容です。

### 三 吉野の「政治学」講義

あとは細かな、付随する論点を三つほどお尋ねさせていただければと思います。私が講義録を扱ったからかもしれないませんが、本書では、東大政治学における「講義」に対する都築先生の強い思いが感じられ

ました。すでに言及しました一九七五年度の政治過程論ノートの分析にはびっくりしまして、これはきつと優をお取りになったのだろうなという感想です。優に届かなかったり、うまく単位を取れなかつたりした者は、絶対にノートを表に出したくない気がしますので、やつぱり資料として利用されるのは、相当気合いを入れてがんばられたノートだなという気がするのです。しかし同時に、吉野講義録の分析でかなり迷った点ですけども、講義録から政治学を析出する時にはかなり苦労しました。たとえば、ノートに誤記があった時に吉野の誤りなのか、筆者のミスなのかなかなか特定できずに悩みましたし、講義はなまものであり、録音機材がなかった時代ですと、資料として使う時になかなか難しいと感じたことを思い出しました。

他には、本書の中には南原の『政治哲学序説』が小野塚の代理で若き日に行った政治学講義がもとになっていることや、丸山の講義録についても言及があります。さきほど一九六〇年度講義録について話がありました。丸山が六〇年代から新しいアプローチを採用して、広く世間に公開される前に講義で実験的に語っていたことが述べられています。また、吉野の有名な「憲政の本義」論文がありますが、われわれの講義録の刊行によって、吉野も『中央公論』に載せる前に先行して講義の中で語っていたことを明らかにできました。本書の一三二頁で言及されていますが、吉野は一九一九年度に政治学の講義を行っていています。これも小野塚の代講で担当したものであって、彼なりに挑戦して政治原論を試みたものの、はじめてだったのどううまくいかなか

た、ちょっと失敗だったという聴講者の回想も残っています。

ここから伺いたい質問ですけども、これに前後して吉野の政治の捉え方が転換したという先行研究群が一九八〇年代から強くなりま  
す。これは「社会」の発見」論と呼ばれています。もちろん、ここで  
の「社会」が何を意味するのか、もともと社会はその前から存在して  
いたではないか、などの議論はいろいろあるわけですが、それまで吉  
野が国家単位で考えていたものが、無政府主義や多元的国家論などを  
取り入れて、違う形で国家や政治の仕組みを説明しようとしたではな  
いか、その転換が見られるではないか、という問いがあります。これ  
は飯田泰三先生が最初に言及され、松本三之介先生の御本でも触れら  
れていた内容であります。その後、吉野作造日記が翻刻されたこと  
もありまして、田澤晴子先生の研究などで吉野のさまざまな社会活動  
の実態が明らかになってきます。

吉野講義録を読んでみますと、一九二四年度講義でも同じように  
語っていたことがわかります。講義の後半にはさきほど言ったオーソ  
ドックスな日本政治史の授業が展開されるのですが、冒頭の目次を見  
ると、政治とは何か、主権とは何か、その上で憲政とは何か、という  
構成になっています。その政治の概念を説明する時に、生活における  
強制力は何か、その上で主権というものをどのように考えていくか、  
というふうに、それ以前の政治史講義のように国家が先あって、そ  
こから国家単位の形成を説明していく枠組みとは、かなり論理展開を  
変えていることがわかります。

本書ではこの転換についてあまり触れられていなかった印象を受け  
まして、あえて触れなかったのか、お尋ねできればと思います。むし  
ろ、本書で中心的に展開されていたのは、この八〇年代からの議論よ  
りもう少し前の段階で行われていた一九一六年の「憲政の本義」論文  
がその後、どう変化したかという話です。一九一八年に出た「憲政の  
本義」再論と、もとの「憲政の本義」論文との変化を問うのは、「社  
会」の発見」論以前の研究潮流のやり方であって、そこをどのように  
意図的にされたのかというお話を伺えれば幸いです。

なお、本書の中では、小野塚喜平次の議論とこの「憲政の本義」論  
文の連続性が指摘されています。これまでは漠然と考えられてしまし  
たが、必ずしも明示化されてこなかったものではないかと思えます。  
本書を読んで、あらためて吉野の民本主義論がそれ自体独立して生み  
出されたわけではなく、それ以前からのつながりの中で出てきた文脈  
を理解できました。吉野自身も自覚的で、なぜ「憲政の本義」論文が  
自分の代表作になるのかよくわからないといった趣旨のことを述べて  
いたという周りの人の回想があります。むしろ、本領は政治史である  
のに、あの論文だけが注目されてしまったことに対する戸惑いのよう  
なことを吉野が述べていたという話があります。

#### 四 政治学者と出身地域

残り二つは話題を拡げるために用意した論点です。さきほど千葉先

生からお話がありました。出身地域の話がおもしろかったので、あえて論点にしてみました。本書二二二頁に「日本の政治学は地方の出身者たちによって作られた」という表現があります。私も新潟出身で、東京で学生生活をしたのち、宮城・仙台で一〇年以上暮らしていますので、日本の中の地域差に注目しがちなところがあります。小野塚が長岡出身であり、吉野が古川出身であるのは、この明治・大正期は地方から上京した人々が多く、特に政治家の世界でも多いので、さほど珍しくない気がするのですが、これを戦後初期まで一般的傾向として引き出すことが可能かどうかをあらためてお伺いしたいと思います。たとえば、本書の二一六頁ですが、南原の戦後教育観の中に地方出身者らしい面が見てとれるという言及があり、また、京極の一九五二年の論文において高知県の分析がなされていて、それが原型として後年まで影響したという話だと私は理解しましたが、このような一般化ができるかという論点です。

私も含め、地方から上京してきた者は、自分の地元と、東京などの大都市で新しく出会う人たちとの間に落差があるわけであって、自分の中で二つの異なる秩序、社会認識、政治認識ができます。その落差を起点にして、内在的に何か政治学が形成される過程を見出すことができるか、導き出せないか、という意味で、なかなかおもしろい指摘ではないかと思つた次第です。他方で、本書では東京人の丸山が全部持つていってしまうと言いましょいか、戦後の政治学を切り開いた意味を強調されている気がするので、一体どちらかな、と疑問に残つた

ところでもありまして、このあたりをさらに教えていただければと思います。

## 五 グローバル化と政治学

最後に、谷口先生の後の報告と伺つておりましたので、一九八〇年代以後の状況、とくにグローバル化について、私なりに思うところを論点として用意しました。本書は一九八三年の『日本の政治』で閉じていますが、そこから先の状況をどう見るかという点です。その後に出た英語版への違和感が本書の中で論じられていて、海外の読者への日本政治の説明が困難であるという感想が述べられています。他方で、一九八〇年代は日本経済も拡大し、アメリカを中心に日本論、ジャパン・スタディーズがさまざまに流行していきます。佐々木毅先生の横からの入力論もこのような文脈だと思えますし、また東アジア、東南アジア地域の経済発展や民主化、それを背景とする中国・韓国との歴史認識問題など、外国との関わりがさまざまに増えてくるのが、この八〇年代以後の流れではないかと思えます。したがって、国際比較という話になったり、あるいは一国の政治を見るときに対外要因を變数として入れようとしたり、計量分析を整えたり、と手法が一気に多様化していく時代と私は認識していますが、それらも外部の状況を考えると必須の流れではないかという気がしています。このあたりについてのご意見等をあらためてお伺いできればと思います。

最後のまとめになりますが、吉野研究の文脈として、一九九〇年代以降、あるいは二〇〇〇年代に入ってから出た吉野研究の意義づけを再確認することができました。本書で論じられている通り、中国や朝鮮への独自の視線を持ったことが吉野の議論の大きな特徴です。満州事変を手きびしく批判したり、石橋湛山のように植民地の放棄とまでは言いませんでしたけれども、しかし朝鮮などの「自治」——括弧つきの「自治」ですが——に関する理解であったり、実践的なサポートであったり、吉野のさまざまな関わりが明らかになっています。二〇〇〇年代に入ってから、そのような中国や朝鮮の状況認識を踏まえ、吉野の国際社会認識、どのように国際社会や「グローバル化」を捉えたのか、についてさまざまに研究されております。政治学者の系譜の中で、吉野の独自性や意義づけを再確認でき、まだまだ研究すべき価値や意義がある人物だったことを強く感じた次第です。雑駁な話で恐縮ですが、私からは以上となります。ありがとうございます。